

## 問題作『バラの名前』の問題訳 『薔薇の名前』の問題点

——「動ジナイ」訳者ははたして「賢明ナ」のか？——

谷 口 勇

もう出ないのではと思われた邦訳『薔薇の名前』が難産の末に誕生した。難産の子には後遺症がつきまといがちだが、本訳書も例外ではないようだ。しかるに巷間では無責任極まる“べたほめ”の一色に塗られて25万部ものベストセラーになっているらしい。「解明シリーズ」を計画し、二本の論文も著した評者としては、そのような態度は取れないし、むしろ敢えて問題点を俎上に載せる必要を痛感した次第である——悪影響を抑えるためにも。

もっとも、この訳が予告通り4年前に出たのであれば、おのずと評者の印象は違ったであろう。約7年も費やし（とは言っても、実情は版權契約切れに追われての“やっつけ仕事”かと思えるふしもある）、関係文献が山積している時に出版された以上、完全無欠であって当然という気がするのだ（翻訳に完璧がないことは十分承知だが）。早い話、訳者（たち？）の無学・無知（無恥？）には驚くほかない。評者の仕事も完全に無視されている（「文献」にだけはあがっているのだが）。

原作（イタリア語版）が難解といっても、それはイタリア語のせいではない。（イタリア語なら中級程度の学力で十分に読めるだろう。）引用の山（主としてラテン語）にあるのだ。しかしこの問題は合衆国で出た *The Key to The Name of the Rose* (1987) が殆ど解明してしまっている（拙訳『便覧』，而立書房，1990）。そうでなくとも、翻訳者たちにはエコが詳細な「翻訳のための資料集」を各国ともに特別に送付しているのに、邦訳者は何とこれすらをも無視して訳したと得意顔に記しているのだから（「訳者解

説」), 呆れるばかりだ。

その挙げ句が「動ジナイ, 動ジルコトハナイノダ, 主ハ」(下, 374頁)。これを見た時, 評者はもうこの訳者(「ピコ・デラ・ミランドラ賞」受賞者)を信用できなくなった。これは「列王記上」(19・11-12)からの引用で「騒乱〔=地震〕の中には, 騒乱の中には主は<sup>エホバ</sup>在<sup>いま</sup>さず」の意であることは, 拙訳『探求』(而立書房, 1988, 289-90頁)からも分かっていたはずだ(本当に拙訳書を参照したのなら)。あるいは, 参照していれば, 恥の上塗り「動ジナイ, 動ジルコトハナイノダ, 賢明ナル読者ハ」(下, 394頁)というもじり文句がでかでかたらテン語入りで連ねられることはなかったはずだ。それとも, もしや聖書の“新解釈”でも行ったつもりなのだろうか?(もっともラテン語には立派な助言者がついていたらしい——なぜかイタリア人は除外されている——から, これは訳者の責任というよりも, こういう助言者を信頼したために, 訳者に墓穴を掘らせる結果になったのかも知れぬ。)

『バラの名前』(無意味な漢字“薔薇”の表記は止めることにする)の勘所の一つに“un Darii”がある。この委細は『便覧』(184-90頁)に譲るはかないが, これは翻訳不能であって, 簡単ながら拙訳『百科』(而立書房, 1988, 257-58頁)にもすでに紹介済みであり, Barbara, Celarent, Darii, Ferio という三段論法の第一格の一つの論式を示している。これをあろうことか, 訳者は「ダリウスの形式」(下, 12頁)と訳している。この論式は“A I I”という母音に意味があり, “A I U”などという三段論法は存在しない(ペルシャ王ダレイオスとでも想像したのか?)。試しに各国語版を調査した所, ギリシャ語版・韓国語版・中国語版がこれを省いている(前者は訳注で説明)ほかは, いずれも Darii としていて正解である。現在のところ, 邦訳が最後かつ最新の訳であり, これらを全部参照できる立場にありながら, この有様なのだ!

もう一つ本作品の中心的な語に“suppositio materialis”(「素材的な代表」の意)がある。これはある名辞が<sup>シニフィエ</sup>所記よりも<sup>シニフィアン</sup>能記を代表する場合をいう(オッカムのウィリアム)。例——「バラは2文字の語である」, 「薔薇は

バラの漢字である」，等。これを訳者は何と「実質ノ取り違エ」（下，320頁）というふうに取り違えている。なお，この概念は別に『便覧』（234頁）を持ち出さずとも，例えば『哲学事典』（平凡社）にもちゃんと出ている（899頁）。訳者の不勉強は責められて当然だ。

以上は一見些細な重箱の隅いじりの感がするかも知れないから，傲岸にして「動ジナイ」訳者氏の鼻っぱしを折るために，最大の問題提起をしよう。それは「訳者解説」の結論，「エーコがメルクのアドソに託して，イタリア文学の本流である〈愛〉を物語ったことは，間違いない」（下，420頁）に對してである。“Ma gavte la nata!” (*Pendolo di Foucault*, p.471) とはこのことだ。たしかに，1327年はペトラルカがアヴィニョンのサント＝クレール教会でロール〔ラウラ〕に巡り会った年だが，『バラの名前』におけるこの見習僧の村娘との情交と，ペトラルカのトルバドゥールの“宮廷風恋愛”とを混同するのは，味噌糞を一緒くたにしたも同然。こういう発想は訳者がダンテ，ペトラルカ，ボッカッチョに携わってきて偶然思いついた牽強附会に過ぎない。少なくともイタリア人にこんなことを言ったら，中高生なみの“発見”として無視されること「間違いない」。試してみるがよい。〈愛〉をいうなら，“書物への愛”こそ本小説の底流ではないのか。

この訳者は7年余も費やして，理解どころか，とんでもない誤解をした上，日本の何も知らぬ読者層を期せずして裏切ったことになる (*Traduttore è traditore*)。嗚呼！ この邦訳はウィリアムの言葉を借りるなら，「君〔読者〕がそれに入り込んだとしても，それからそれを捨てたときに役立つ」（伊原書，p.163）代物である。

大して難しくもないイタリア語で書かれているのに，訳者の専門のはずのこの外国語の知識も疑いたくなる箇所は一・二に止まらない。ほんの一例を示せば，「蛇ド蛙ノ関係ド同ジダ」（下，86頁〔ママ〕）。原文は“E assii la serpe et la botta.”これをすなおに「蛇もヒキガエルもな」とは解さないのだ。後に引き続いて“Et quando loro la *mordono*, la bellula corre alla fenicula ...” (p.311) と複数動詞が来ているし，ここでサルヴァトー

レが口にしているのは、イタチがバシリスクやネズミや蛇やヒキガエルをひどく怖がっているということなのであるから、「こいつらに噛まれる」となるべきなのに、訳者は「蛇ニ噛マレル」（同頁）と単数に変えている。これでは、文法の初歩も知らぬと言われても仕方あるまい。

本小説では名前が極めて重要な働きをなしているのだが、まず登場人物の表記もいい加減に訳されている。Adso をアドソとしたのは映画台本の影響かも知れぬが、そんな発音をイタリア人がしているのを聞いたことがない（むしろ、“アッツォ”だろう）。それ以上に、これは Watson との暗号が感じられるから、アトソン (Adson) と仏・独の表記がベターではないか。ベレンガーリオ・ダ・アルンデル (Berengario da Arundel) も Arundell 伯との暗号がある以上（拙訳『後日譚』、而立書房、1989、166頁），“アランドルのベレンガー”であるべきだ（この場合は、映画台本の訳は正しい）。評者の手許に *Some Papers of Lord Arundell of Wardour* (1909) なる本があるが、これによると、この人物は「神聖ローマ帝国の伯爵の、第12代男爵」とある。また、マラキーア・ダ・ヒルデスハイムも、ドイツ出身が明白なのだから、ドイツ式に“マラキアス”とあるべきだろう（この訳者氏がドイツ語に弱いことは色々の点から想像できるのだが）。

今度は作中に出てくる実在の人物名や史実の表記について。これまた、無学・無知・不勉強・非常識を無恥にも露呈した表記にこと欠かぬ。アラブ関係からは、まず「カバヤキ」（上、342頁）とはこれ如何？ もっとも、これは各国語版ともそのままだから、余り責められぬかも知れない。推察するに、エコはスペイン書からこれを採用したのであろう。もちろん、“キブジャーキー”のことなのだが、スペイン語では、“ジャ”は“ya”と表記されるから、これがそのままイタリア語に移されてしまったという次第。これは致し方ないにしても、アヴィケンナの有名な *Canone* が『原理』（下、98頁）とあるではないか！ アルキメデスじゃあるまいに。『（医学）典範』として抄訳もなされているが、これが17世紀までヨーロッパの標準的教科書だったことは常識に属する。訳者にはアラブ関係の助言者もいたようだから、“二

重の”恥さらしというものだ。

この訳者氏は「…主義派（者）」がよほど好きと見える。「厳格主義派」(spirituali) はまだしも、「悪魔主義者たち」(上, 314頁) はもう頂けない。これは固有名詞と普通名詞との取り違い（またしても！）で, Lucifer da Cagliari (カリアリのルチフェル, 370年頃没) の信者たち（“ルチフェル派”）のことなのだ。翻訳, 恐るべし。もっと恐るべきは, こんな翻訳を“選定図書”にしている日本図書館協会である。無知以外には考えられないことだ。

参考までに記すと, きれいな訳書のカヴァーとても, 独創になるものではない。実は前年(1989)に出た韓国版の盗用といわぬまでも, イミテーションであることは歴然としている(写真参照。実物はカラー)。

「欠陥翻訳時評」で著名なベック剣士の言葉に「はなはだ困るのは, 無学無知…で無茶苦茶を書く人である」「固有名詞に限らず, 翻訳にはいろいろと常識がいるもので, そのへんに自信のないお方は, まちがっても…翻訳などなさらぬがよい」(「翻訳の世界」1990年5月号) という忠告があるが, これは“De te fabula narratur”(上, 388頁。訳すれば, 「君のことなのだ」), 何事にも動ジナイ, 賢明ナル訳者先生殿。

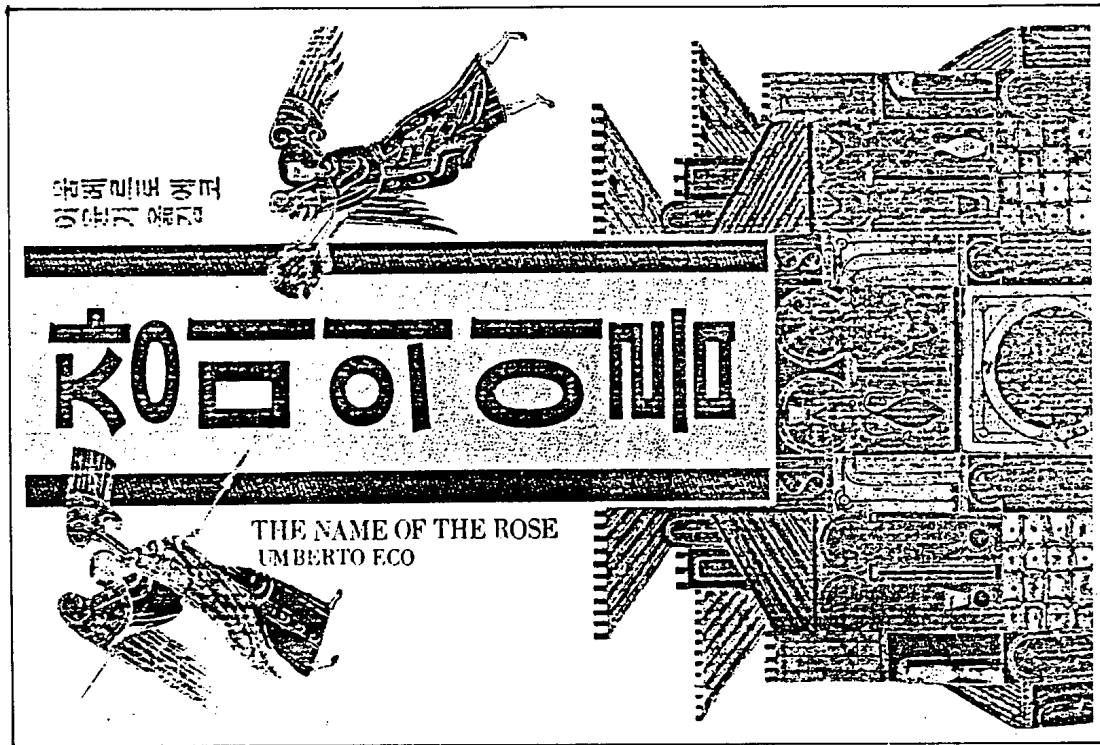
(付記1) これは日伊協会が機関誌 *Cronaca* に執筆を依頼しておきながら, 二回も開いた理事会(この訳者はその一員である!) が却下した拙稿\*に多少手を加えて, 公表するものである。大方の冷厳な批判を待ちたい。なお拙稿「シニフィアンとしての『バラの名前』」(「社会新報」1990年5月15日号) をも是非参照されんことを。「素材的な代表」が本作品の中心であることを知るためにも。

(付記2) 執筆したのは本稿が早いのだが, 活字としては評者の講演記録「邦訳『薔薇の名前』の問題点およびエーコの新作『フーコの振り子』」(日本イタリア京都会館誌「イタリアーナ」vol.19 ('90-11) のほうが先に出てしまった。こちらの一文も参照されたい(pp.39-44)。

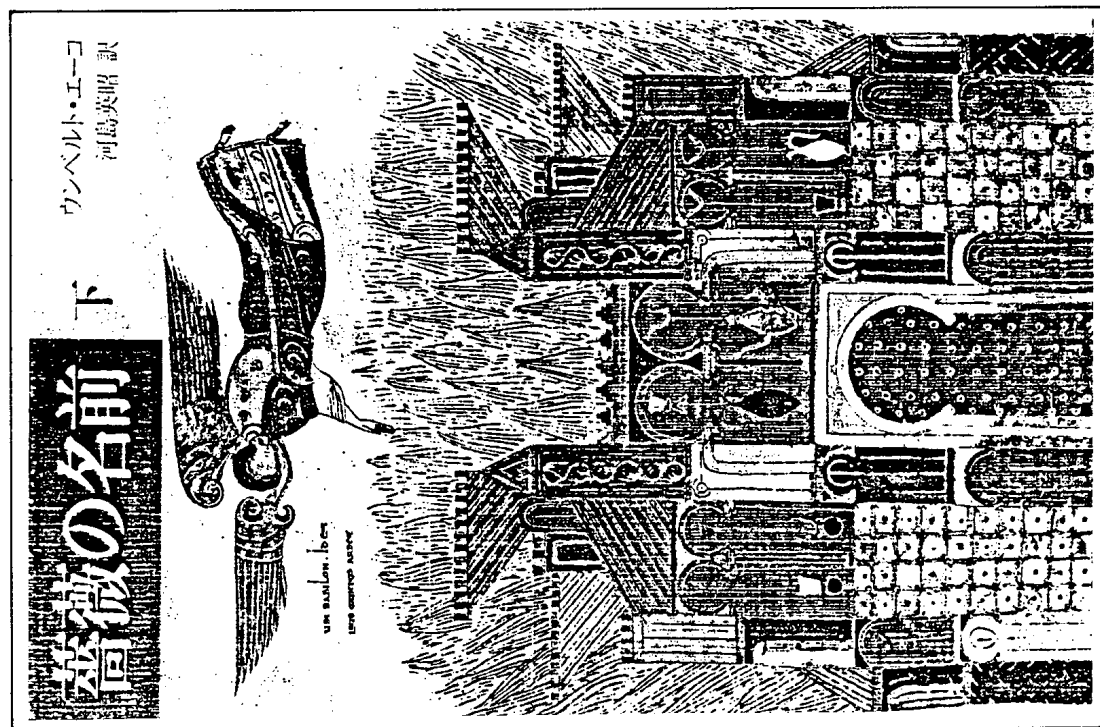
このようなとんでもない迷訳（30カ国語中、最悪の出来と言ってよい）が翻訳賞に選ばれたのには、呆然として言葉もない。いかにひどい選考が行われているか、あるいは無知な人が衝に当たっているかの証し以外の何物でもない。もっと呆れ果てたことに、この訳者は何とインタビューの中で「エーコなどはまだまだ。記号学をやめて頑張らないと……」（「読売新聞」1990. 10. 2）なぞと無礼千万な言を吐いている。“Ma gavte la nata!”とまたしても言わずにおれない。「翻訳者は俺の家族だ」とまで信頼しきっているU・エコが哀れだ。そして、何よりもこんな形容のしようもない食わせ者の訳者によって、“世紀の問題作”が我国に紹介され、こんな者に賞が授けられたことは不幸かつ恥ずかしい出来事と言わねばならない。

\*添付の複写見本は、同協会が問題だ、としてクレームをつけてきたものの一部である。（アンダーラインもそのまま）。なお、同協会は原稿料を送ってきた（!）が、もちろん評者は突き返した。日本の一部イタリア関係者のおぞましがここに如実に現れている。言論を圧殺し、金で口封じを試みるとは!

（たにぐち・いさむ／文学部／1990.10.12 受理）



韓国語版 表紙



東京創元社版 カヴァー

＊ 問題作の問題訳の問題点  
——これでも「訳者は動じない」  
のか？

谷口 勇

もう出ないのではないかと思われた邦訳『薔薇の名前』が難産の末に姿を現した。大体において難産の子には後遺症がつきまとうものだが、本訳書もその例外ではないようだ。しかるに巷間では無責任な“べたばめ”の一色に塗られて20万部以上のベストセラーになっているらしい。「解明シリーズ」を計画し、論文も二本著した評者としては、とてもそういう態度は取れないし、むしろ敢えて問題点を読者に明らかにすべきだと決心した次第。

もっともこの訳が3年前に出たのであれば、自ら評者の印象も違ったであろう。約7年も費やし（といっても、実情は版権切れに追われての“やっつけ仕事”かと思えるふしもある）、文献が山積みしている時に出版された以上、完全無欠であって当然という気がするのだ（翻訳に完璧がないのは十分承知だが）。早い話、訳者（たち？）の無知・無恥には驚かずにおれない。評者の仕事も全く無視されている（「文献」には出ているが）。

原作（イタリア語版）が難解といっても、それはイタリア語のせいではない（イタリア語なら中級程度の学力で十分だろう）。引用の山（それも主にラテン語）にあるのだ。しかしその問題は合衆国で出た The key to The Name of the Rose (1987) が殆ど解明してしまっている（拙訳『便覧』、而立書房、1990）。そうでなくとも、翻訳者たちには、エコが詳しい「翻訳のための資料」を各国ともに送付しているのに、邦訳者は何と、これすらをも無視して訳した（「訳者解説」）というから、呆れるほかない。

その挙げ句が「動ジナイ、動ジルコトハナイノダ、主ハ」（下、p.374）。これを見たとき、評者はもうこの訳者が信用できなくなった。これは「列王記上」

がある。それはサルヴァトーレがバシリスクや、ネズミや、蛇やヒキガエルを、イタチがひどく怖がっていることを話題にしているもので、原文：“E assi la serpe et la bolla. Et quando loro la mandono, la bellula corre alla finicula …” (p.311) 中の“assi”の解釈に関わる。訳者は「蛇ト蛙ノ関係ト同ジダ」（下、p.86）とひねった訳をしており、これをすなおに「蛇もヒキガエルもな」とは解さない。後に“loro la mandono”と複数動詞が来ているのだから、「こいつらに喰まれる」となるはずなのに、「蛇二喰マレル」（同）と単数に変えている。文法の初歩も知らぬと言われても仕方あるまい。以上はほんの一例である。

きれいなカバーに誰しも目を止めるだろうが、実はこれとても韓国版（1989）の盗用といわぬまでも、模倣であることは歴然としている（写真参照。ただし実物はカラーである）。なさけないとしか言いようがない。「欠陥翻訳時評」で著名なベック剣士の言葉「はなはだ困るのは、無学無知 … で無茶苦茶を書く人である」（『翻訳の世界』1990年5月号）というのは「君のことなのだ」（上、p.388 “De le fabula narrantur”）、何事にも動じない、賢明な訳者よ。

1

5

日伊協会からクレームをつけられた原稿見本